

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 116 Mar.

都留文科大学 地域交流研究センター 機関誌
『フィールド・ノート』 no. 116 Mar. 2024

特集

古地図を手に、
まちを訪ねる

川がつなぐ昔と今

桂林寺の節分会

癒しを届ける庭木職人

「谷村がひとつになるお祭りでした」

横山家の蔵から



三ノ側公園に咲くウメ。都留の冬にいちはやく彩りをあたえている(2024年1月22日)

FIELD·NOTE

no.116 Mar.

特集 古地図を手に、まちを訪ねる

川がつなぐ昔と今 08

桂林寺の節分会 11

癒しを届ける庭木職人 14

「谷村がひとつになるお祭りでした」 17

横山家の蔵から 20

26 センサーカメラが写した動物たち 37 つるアルバム

28 テントウムシの冬 40 つるを味わう

30 手作りを楽しむカフェ 41 歌と重ねていく

33 フィールド暦 44 ムササビ観察日記

34 はなちゃんのカフェ&ショップ

— 笑顔から生まれる人の輪 —

45 集う、憩う 後編

48 都留の風景写真集



表紙写真

「さんちょう」の看板と背の高い街灯が並ぶ通りです。ふだんは静かですが、夕方になると下校する子どもたちの声が遠くから聞こえてきました（2024年2月1日）

FIELD・MAP

今号の特集取材先



① 家中川周辺



② 桂林寺



③ 都留市役所



④ 西涼寺

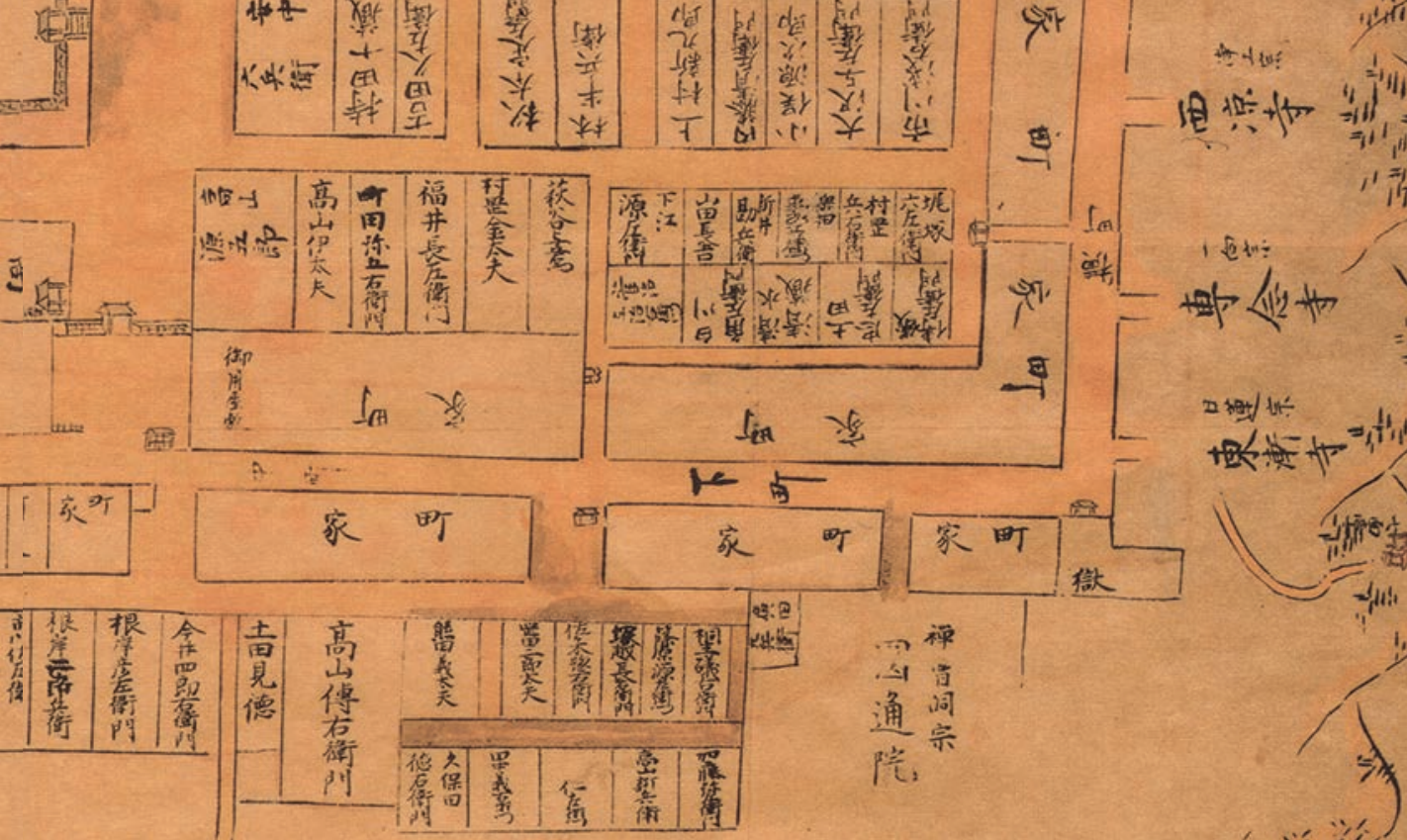


⑤ 横山家の蔵



つる
山梨県都留市
面積 161.63km²
総人口 28,681人
(2024年3月現在)





特集

古地図を手に、まちを訪ねる

きっかけは、やむら谷村にある和菓子屋さんの包装紙でした。

かつて城下町だった谷村の地図を

包装紙の絵柄として使っていたのです。

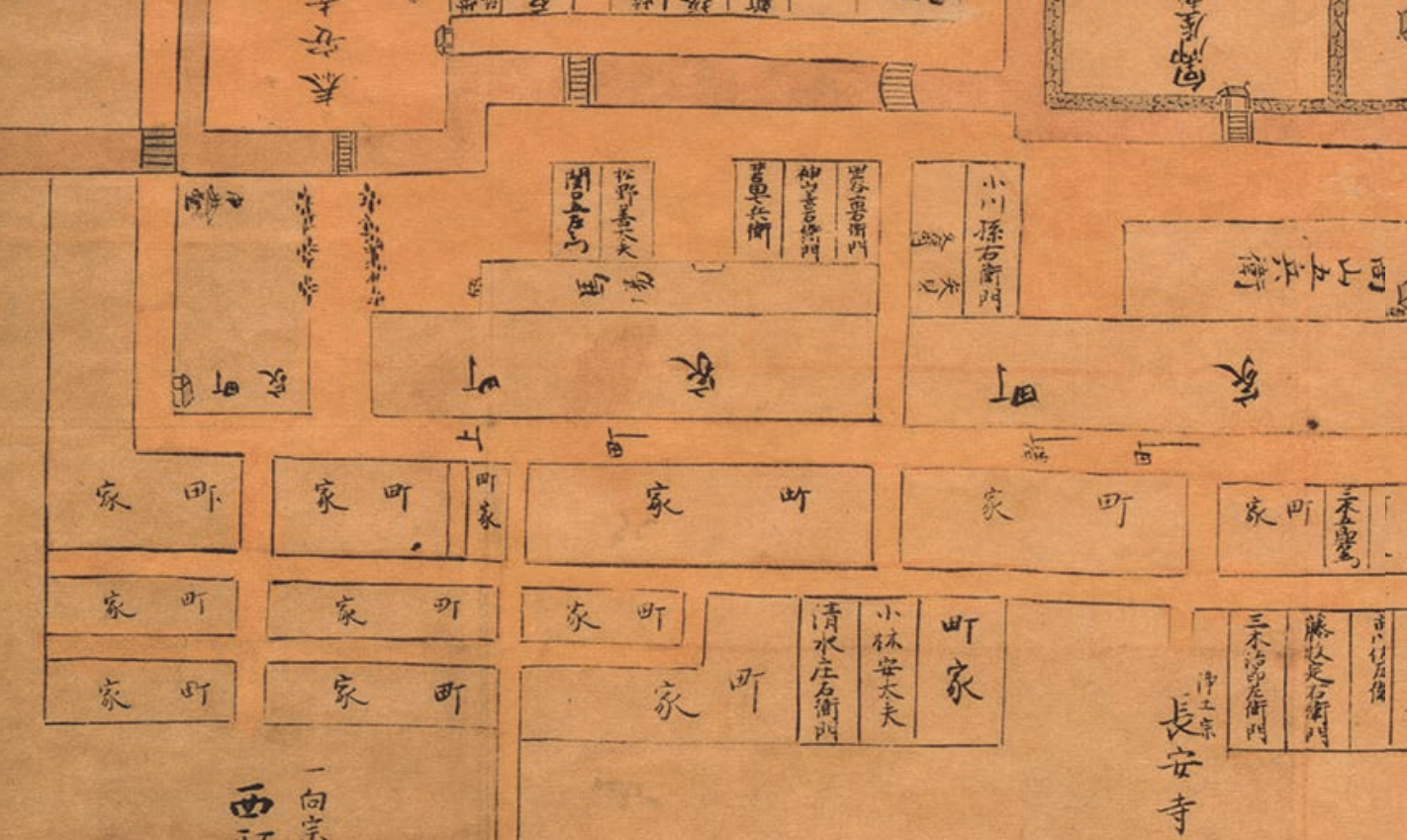
古地図を眺めていると、いくつか発見がありました。

「通りやお寺の位置は変わってないね」

「こんなところにお屋敷があったんだ」

ふだん暮らしているまちの知らないすがたに

どんどん興味がわいてきました。



地図に載っていない、
まちのようすをもっと知りたい。

そう思った私たちは、
かつてのようすを想像しながら、まちを歩きました。
そうして見つけた都留の今を、ここに記録します。



都留市中央にある「すがや製菓店」では、先代から「甲州谷村城繪圖」をプリントした包装紙を使っている。上の地図はこれを拡大したものだ。原本は横山家 (P.20-P.23) が所有している。包装紙の右下には、都留市のPRにもなるようにと、市章や市の花などの情報も載せている。

川がつなぐ昔と今

古地図を見ていると、桂川かつらがわはあったが谷村やむらを中心に流れる家中川かちゅうがわは載っていない。家中川は存在していたのだろうか。また、家中川は人びとにとつてどのような存在だったのだろうか。じっさいにまちを歩いてみることにした。

都留を流れる家中川

家中川は、谷村藩主であった秋元泰朝あきもとやすともによって江戸時代初期に造られた用水路だ。家中とは家臣のことで、谷村城の周りには家臣の

屋敷地を流れていたことから、そう名づけられた。城下町だったころの名前が今でも変わらず使われていることに、当時のなごりを感じて嬉しくなる。本来の由来とは違うが、まちの中心を流れる川という意味にもとれる「家中川」という名前が、私は好きだ。

家中川ができる前、都留の地域は平坦で水が満足になく、稲作をはじめとした農業に適した土地ではなかったそう。そこでかんがい事業として水路の開発が始まった。

暮らしのとなりを流れる

谷村を歩いてみると、どこを歩いていても水の音が聞こえてくる。道のすぐ脇には整備された川があり、勢いよく水が流れていたり、ゆつ

たりとした流れのなかで鯉が優雅に泳いでいたりする。水面に太陽の光がきらきらとかがやいていた。もつと川のようにすを知りたいと思った私は、まだまだ寒い日が続くなか、谷村を歩いてみることにした。

商店が集まる通りを歩いていると、道路の下を川が流れていることに気がつく。橋が道の一部としてつながっており、名前を「田原橋たはらばし」というそうだ。橋の下の土台には「家中川」と書かれている。驚いたのは、川の上にゴミ収集場があることだ。鉄骨を何本か川に渡らせて、収集場を支えている。はじめは橋の上に設置されているのかと思っていたが、下からのぞき込んでやつと気がついた。さらに田原橋の脇道を進むと、川が家の下を通っている場所もあった。家が崩れたりしないのだろうかかと心配になったが、どうやら川に面した土台は鉄材を

使って安定させているようだ。このあたりは川幅が4メートルほどある。川の流れが速いため水しぶきが上がり、川が白く見える。それ

ほど流れの速い川のすぐ横に、家があつて人が暮らしている。どうしてここに家を建てようと思ったのだろうか。

歩いて見つけたもの

国道139号線から枝分かれする道を左に進むと、道の右側には家中川が流れていた。川



田原橋の横に造られたゴミ収集場。どうやってゴミを入れるのだろうか（2024年2月9日）



左：歩いていると見えないが、道の下にも川が流れている（2024年2月9日）
 右：家に入るために架かる橋。家によってはいくつも架かっていることもある。道と家の間に家中川が流れている（2024年1月25日）



幅はさつきよりも狭い。どうして急に狭くなったのだろう。ふしぎに思つて下をのぞき込むと、川が道路の下にも広がっていた。歩いているときに川として見える範囲が1メートル50センチほど、そして道路の下にも同じくらいの幅があり、合わせて3メートルほど川幅があった。道路を整備するときに十分な広さがなかったために、このような造りになったのだろうか。家と川の距離が近い、谷村だからこそ見られる光景かもしれない。

さらに歩いていくと、家の玄関の前に架かっている橋のようすに疑問を持った。等間隔というわけではなく、それぞれの家の大きさに合わせて橋の幅も変わっている。い

つ橋ができたのだろうか。家に合わせて橋が造られたのか、それとも以前からあった橋に合わせて家が建てられたのだろうか。

私が川をのぞき込んだり、手を広げて橋の長さを測ったりしていたら、庭先で話していた二人の女性と目が合った。「こんにちは」と挨拶して、川について調べていることを話したところ、知っていることを教えてくれた。

お話をうかがったのは、みずはら 栄子さん（84）と好子よしこさん（79）。二人は60年ほど前に、都留にお嫁に来たそう。本当の姉妹のように、仲が良さそうにお話していた。突然話しかけた私にいやな顔ひとつせず、「何年生なの」「地元はどこ」と聞いてくださり、私もリラックスした気持ちでお話をうかがうことができた。

「この橋はそれぞれの家に合わせて造られているのですか」ときくと、それぞれの家が河川許可証を得て造つたものだと言ってくれた。橋を使うため税金を払っているそう。橋が等間隔に並んでいない理由に納得した。

川この記憶

栄子さんと好子さんの家は隣り合っている。もともと30年ほど前までは、二人の家とその

隣の家の3軒分が、「かしまや鹿島屋」というスーツの裏地を生産する織物工場だったそう。工場では一時期、女工さんを50人ほど雇っていたという。女工さんたちが目の前の家中川を泳いでいたと聞いたこともあるという。「当時はそれほどきれいだったんだろうね」。栄子さんの話を聞きながら、私もそのころのようすを想像してみる。今でも透き通っていてきれいな家中川だが、当時は今よりもゴミが少なく、もつときれいだったのかもしれない。今は、川は近づく危険だとされており、近づくことを禁止する看板を見ることがある。当時はそういった決まりはなく、川はそこに住んでいる人びとにとって共通の財産のような認識だったのかもしれない。今よりも川との距離が近い当時の生活が、うらやましくなった。

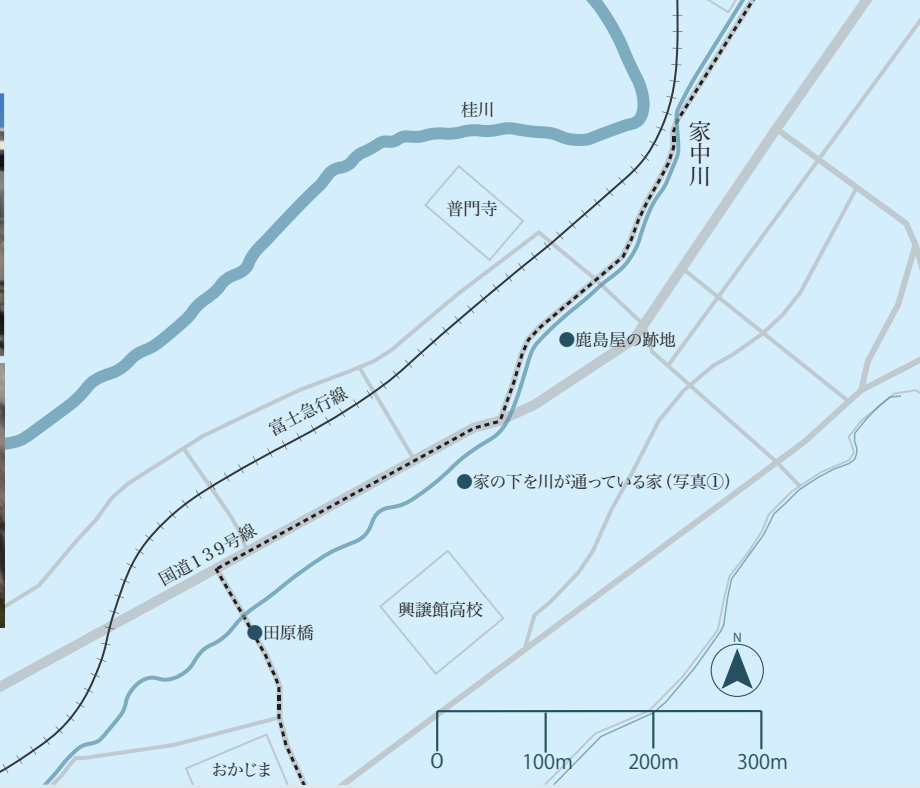
「うちは織物工場で、その家は染色工場」と向かいの家やとなりの家を指さしながら教えてくれる。どうやらこのあたりは織物の生産が盛んな地区だったようだ。「みんな使った水をこの川に流して」という二人の話から、工場があった当時のまちのすがたが思い浮かんでくる。工場から機械の音が聞こえてきて、子どもが川遊びをしている。お昼の休憩時間には、



① 田原橋の近くにある家。この家の下を川が通っている

② 川岸に鉄骨を渡して、その上に家を置いている

※歩いた道を点線で表しています



この短歌は、1925年に出版された『瑠璃光』という歌集に収録されている。本学図書館に刊行当時の『瑠璃光』があったので、借りて読んでみた。封筒に保管された本を取り出すと、かどの印刷がとれていたりシミがあったりと、見た目からも長いあいだ読まれてきたことがわかる。色あせた紙に印刷された短歌を何度も読み返す。本に刻まれたことばが、家中川が本場に存在したことを証明してくれているようだ。歌集と私とは接点があるわけではない。しかし、歌集のなかに「谷村の川」として家中川の存在が書かれていることで、急に身近に感じられるのがふしぎだった。彼女が歩いた当時のまちと私が歩いた今の谷村が、家中川が存在してつながっていく。

与謝野晶子が見た家中川

後日、田原にあるニコットの向かい側に、与謝野晶子が詠んだ短歌の碑を見つけた。「八月の富士の雪解の水湛へ 甲斐の谷村を走る川かな」富士山の雪が溶け、家中川へと勢いよく流れるようすが歌から想像できる。

この短歌は、1925年に出版された『瑠璃光』という歌集に収録されている。本学図書館に刊行当時の『瑠璃光』があったので、借りて読んでみた。封筒に保管された本を取り出すと、かどの印刷がとれていたりシミがあったりと、見た目からも長いあいだ読まれてきたことがわかる。色あせた紙に印刷された短歌を何度も読み返す。本に刻まれたことばが、家中川が本場に存在したことを証明してくれているようだ。歌集と私とは接点があるわけではない。しかし、歌集のなかに「谷村の川」として家中川の存在が書かれていることで、急に身近に感じられるのがふしぎだった。彼女が歩いた当時のまちと私が歩いた今の谷村が、家中川が存在してつながっていく。

都留を流れる家中川は、長いあいだ人びとの生活を支えてきた、都留にとってなくてはならない川だった。川をたどると誰かの暮らしが見えてくる。地図に載っていないかった家中川は、少しずつがたを変えながらも人びとの記憶に残り続けていた。家中川は、まちの昔と今をつなぐ道しるべのような存在だったのだ。川に囲まれたこのまちが、さらに好きになった。

桂林寺けいりんじの

節分会せつぶんえ



節分が近くなり、都留ではどのように節分が迎えられているのか、ふと気になった。都留市金井かねいにある桂林寺では、節分会という行事を催しているそうだ。どのような行事なのか、桂林寺に行ってみることにした。

横山幸乃（国文学科1年） Ⅱ 写真



本堂でポーズを決める鬼のみなさん（2024年2月3日）

桂林寺の節分会の歴史

1月中旬、桂林寺を訪れた。副住職の織田宗泰おだ そうたけさん（43）に節分会についてお話を聞く。

桂林寺は、郡内地方を治めていた小山田氏の菩提寺ぼだいじとして、1393年に建立された。歴史のあるお寺だが、節分会は毎年行われていたわけではない。復活したのは最近のことだという。

節分会とは、立春の前日に行われる、災厄をはらって世界の平和や家内安全を祈ることを目的とした行事だ。2016年、本堂を建て替えたさいに見つかった年中行事表に、かつて節分会を行っていたことが記されていたそう。宗泰さんはそれをきっかけに、2017年に節分会を復活させた。宗泰さんが修行僧をしていたお寺で行っていた、鬼の格好でまちを歩くというアイデアも交えた。毎年鬼の役は知り合いの和尚おしょうさんにし、ご自身は祈禱を行うそうだ。

節分会で訪れる場所は宗泰さんにご縁のある場所だ。なかでも幼稚園は、宗泰さんのお子さんが通っていた、関わりがある場所だという。節分当日に、私も宗泰さんに同行する

ことになった。まちの人たちの反応を直接見られるのが楽しみだ。

節分会のありかた

2月2日、この日は桂林寺の近くにある宝保育所への訪問に同行する。都留市駅前たかで、宗泰さんの奥さんである果奈かなさん（44）が車で迎えてくれた。

果奈さんはNPO法人「にこ研」に所属している。「にこ研」は、主に未就園児とその親を対象とした子育て支援を行う団体だ。

「にこ研」のメンバーとのあいだで、鬼が子どもたちを怖がらせるのは良いことなのだろうかと話したことがあるという。果奈さんは宗泰さんに、最初から優しい雰囲気です子どもたちの前に登場することを提案した。しかし宗泰さんは、それでは怖い鬼の存在を通して自分の邪念を取り払うという目的が果たせないのではと心配したそうだ。時代に沿った子育てと伝統が共存するためにはどうすればよいか、工夫しているのだ。

保育所の駐車場に、宗泰さんと他のお寺の和尚さんがやって来た。今日は宗泰さんも赤鬼の格好をしている。宗泰さんたちが保育所



痛がるふりをする赤鬼（宗泰さん）。名演技が光る
(2024年2月2日)

へ入っていくと、待機していた子どもたちはいつせいに豆を投げ始めた。宗泰さんは金棒を頭の上に持ちあげて鬼役に徹している。

最後は、子どもたちが声をそろえて「いい子になるよ」と宣言した。泣いていた子ども鬼とハイタッチをしたり、豆をあげたりしている。保育所の先生に、慣れるのが早いですねと声をかけると、「さつきまで泣いていたのにねえ」と目を細めていた。子どもたちが全力で行事を楽しむことは、先生たちにとって嬉しいことなのだろう。

帰りぎわ、子どもたちが鬼と仲良くなった話をする時、果奈さんは「怖いだけで終わっ

ちやうとだめなんでしょうね、子どもたちがいい子になろうと思うから、鬼も怖い存在ではなくなる」とおっしゃった。

子どもたちがただ鬼を怖がるのではなく、鬼と会い、どう感じて変わろうとするか。それが節分会において、大切なことのひとつなのかもしれない。

節分当日

2月3日、桂林寺に着くと、果奈さんが本堂の前に集まった人たちの案内を行っていた。忙しいなかでも、果奈さんは私に気がつくくと、今日はよろしくねと声をかけてくれた。

しばらくすると続々と人がやってきた。高年齢のかたから親子連れまで、幅広い世代の人たちが本堂に入っていく。「お寺離れ」という言葉があるほどだから、節分会に関わるのは限られた世代の人たちだけだと思っていた。年齢に関係なくいろいろな人が自由に集える場所があることに、心があたたくなる。

祈祷が始まる時間になった。私も本堂のなかに入り、入り口近くの畳に正座する。澄んだ空気に畳と線香の香りが漂っていて、気分が落ち着く。

祈祷を受ける人たちは赤いじゅうたんに座り、見学の人たちはその周りに座って、静かに祈祷の始まりを待つ。子どもたちは何が始まるのか分からないようで、キョロキョロとあたりを見回している。

ドオン、と太い音が響き渡った。音がしたほうを見ると、赤鬼が本堂の隅で太鼓を打ち鳴らしている。太鼓が鳴りやんだあと、前方に住職さん、宗泰さん、三人の鬼が現れ、読経が行われる。祈祷の目的は心のなかの鬼を滅し、厄病退散を願うことだ。鬼が祈祷を行うというのは、なんだか面白い。

祈祷を受ける人たちが静かに手を合わせるすがたは、とても清らかだ。見ている私の心も、きりつと引き締まってくる。

祈祷が終わると、鬼たちがゆつくりと立ち上がる。豆まきの始まりだ。子どもたちは自ら鬼に近づいていき、なかには金棒を掴んでいる子もいた。そのあいだ、宗泰さんやほかの和尚さんが豆や駄菓子を投げてまわる。子どもたちは、持ってきた袋がパンパンに膨らむまで拾い集める。それを見守る宗泰さんたちの表情はとても柔らかく、楽しそうでもあった。

三町商店街へ

午後、三町商店街のお店をまわる宗泰さんたちに同行する。家やお店が立ち並ぶなかを鬼が歩いている光景は、夢のなかに出てきそうなくらい奇妙なものだった。

宗泰さんたちが最初に訪れたのは、「すがや製菓店」だ。店内に入ると、お店のみなさんがニコニコしながら宗泰さんたちを迎えた。宗泰さんはお店のかたと言葉を交わしながら、商売繁盛祈願のお札を渡す。そのあと、鬼たちによる舞が披露された。舞は毎年披露されていて、お店のかたと見せるときは商売繁

盛を、それ以外の場合は厄病退散を祈願するものだという。

次のお店へ移動するあいだに、黒鬼役の鷺津義昭さん（37）にお話をうかがった。鷺津さんは北杜市にある浄居寺の副住職だ。宗泰さんの親戚で、何度か鬼の役を任されている。今年の節分のようなすを尋ねると、「土曜日で人通りが多いからか、いろいろなリアクションがもらえて面白いです」とおっしゃった。たしかに私が同行していたときも、車に乗っている人たちが目を真ん丸にして見つめていたり、車を止めて写真を撮ったりしていた。



- ① 祈禱を待つ人たち
- ② 青鬼にかかえられて号泣する子ども
- ③ 子どもたちに混ぜだつて手に入れた福豆



そのあと三町商店街のお店を訪れ、商売繁盛の祈願を行った。舞を動画におさめる人、豆まきをする人、「またきてね」と来年を楽しみにする人、鬼の衣装を「よくできているね」とほめる人。どの場所でも、楽しそうに鬼を迎える人たちと出会うことができた。

三町商店街のお店をまわり終わったあと、宗泰さんは「トラブルが起ころることなく、まわることができました」と、顔をほころばせた。宗泰さんの安心したような笑顔を見ると、私も嬉しくなった。短い時間でも一緒にまちを歩いたことで、宗泰さんたちの仲間になれ



中村薬局にて、豆を投げられる鬼たち

たように感じたからだろうか。ひと仕事やり切ったような、満たされた気持ちになった。

宗泰さんからお話を聞き、節分会は災厄をはらい、平和を祈るための行事だと知った。そしてじつさいに節分会にふれてみると、豆まきや鬼の舞を楽しむ人たちの笑顔であふれていた。節分会で災いをはらうためには、この笑顔も欠かすことができないのだ。桂林寺の節分会は、これからもまちの人たちを笑顔にして、福を届けてくれるだろう。



水越さんの娘さんが撮った写真。愛犬も作品づくりを応援しに来たのだろうか（水越勝明さん=写真提供）

癒しを届ける 庭木職人

都留市役所に訪れたとき、見たことがあるキャラクターの顔がかたどられた庭木を見つけた。都留市役所の職員さんにかがってみると、水越勝明さん(79)が作ったという。作品を作ったきっかけと、剪定の仕事に対する思いが知りたくて水越さんにお話をうかがった。

原優希（国際教育学科2年）=文・写真

自ら学ぶ

はじめて水越さんにお会いしたとき、作品を知ったきっかけを伝えると嬉しそうに笑った。過去に取材を受けた新聞記事や娘さんが撮った写真を嬉しそうに見せてくださる。まずは庭木が好きになつたきっかけと剪定の仕事についてうかがった。

水越さんは小さいころから庭木が好きだった。庭木の迫力に魅了され、自分も大きくなつたらこんなものを作ってみたくらいと思つたそう。そのため、休日に植木屋さんに行つては仕事をしているようすを見たり、剪定の仕事を教わつたりしていたという。約10年前にバスの運転手の仕事を辞めたあとシルバー人材センターに所属し、剪定の仕事を始めた。シルバー人材センターは市内に住む60歳以上の高齢者を対象に上野原市、大月市、都留市を拠点に活動している。今では水越さんを含む3名のかたが剪定の仕事をしている。

剪定の仕事に就いたあとも水越さんは自ら学び続けることをやめなかった。分からないところは先輩や友人に聞き、何度も練習を重ねていった。「何回も何回もやって技術を磨

かないと、しっかりとした植木を作ることができない」。コツを学ぶのではなく、地道に自分なりに練習をしていくことが上達への近道なのかもしれない。

当時、剪定を始めるときに講習があった。講習では植物ごとに変わる枝の切りかたを学ぶ。剪定の仕方は教えてもらえるが、そのあとの過程については自分で考えなければならぬ。水越さんにとつてこの「自分で考える」というのが剪定をするうえで難しいことだそう。植物という生きものを扱うからこそ、過程をよく考えて切っていくことが必要だ。剪定は木の刈り込みをする仕事だが、ただ切るだけの簡単な仕事ではないということに気づかされた。

「好き」を活かして

市役所には水越さんがボランティアで作った作品がある。2022年はアンパンマンとテーマのない顔をはじめ、2023年にはドラえもんやパンダを作った。テーマのない顔には作品を見た人が、どのような顔に見えるのか自由に想像してほしいという想いが込められているそうだ。じつとテーマのない顔を



- ①身長の2倍はある脚立。はじめて見る高さに思わず「怖くないですか」とうかがう。水越さんによると、さらに高い脚立で作業をすることもあるそう(2024年2月17日)
- ②市役所にあるマツの雪吊り。水越さんとほか4名で作ったという(2024年2月17日)
- ③剪定で使われる刈り込みバサミ。親指ほどある太さの枝も切ることができるという(2024年2月17日)

眺めているとモアイ像やお坊さんなどいろいろな顔が頭に浮かんでくる。見れば見るほど、想像が膨らんでわくわくした。

それぞれモチーフになったものの顔は、写真を参考にして作ったという。「ほんとはイラストを見て作ったほうがやりやすいんだけどね」と水越さんは笑いながらおっしゃった。キャラクターの細かい表情や立体感を色や形に頼らず、「切る」だけで表現していることに驚いた。

作品を作るさいに使った植物はカイヅカイブキだ。一本のカイヅカイブキにつき、ひとつの顔をかたどっている。4つの顔が横一列に並んだようすは、市役所に立ち寄った人たちの目を惹きつけているだろう。

また、人びとの心を明るくすることも作品作りのきつかけだ。「コロナ禍で人びとの気がパツとしない。気分が落ちてきているから、少しでも作品を見て癒されてもらいたい」とおっしゃった。庭木を使って作品を作ること、庭木で人びとを明るくするというアイディアはつとさせられる。水越さんの作品は都留を話題にするだけでなく、きつと都留の人びとの心を明るくしてくれているだろう。

生きる手助けをする

市役所で作品づくりを始めたのは、都留を話題にしたいという気持ちがきっかけだ。毎年、水越さんは市役所から木々の剪定を頼まれているという。過去に市内の学校で作品づくりをした経験を活かし、水越さんから市役所に庭木を利用した作品づくりを提案したそう。完成後、まちだけでなくニュースにも取り上げられて評判を呼んだため、翌年の2023年も作品づくりに挑戦し続けたそう。

剪定をするときに使用する道具は、ヘッジトリマーやのこぎり、刈り込みバサミだ。片手で持てる道具から両手で持つて使う道具まで大きさもさまざまだ。はじめて見る道具に興味を湧く。ヘッジトリマーは枝や葉を刈り

込む道具で、小さいもので21センチ、大きいもので50センチあるという。水越さんは、「植物の特徴に合わせて道具を使い分けられないとうまく切ることはできない」とおっしゃった。

剪定をするときは、植物の芽を切らないように注意することが大切だ。芽を切ってしまうと、芽吹く時期になったときに芽が生えず植物が枯れてしまうからだという。どれが芽なのか見極めるのは難しそうだ。

水越さんは剪定の技術を身につけるとともに植物に関する知識も身につけていった。「植物が生きていく手助けをするように切ることで大切」。剪定の仕事はただ綺麗にするだけでなく、植物の成長を支える仕事でもあるのだと知った。

喜んでもらうために

仕事をするうえで、お客さんとのコミュニケーションは欠かせない。お客さんからの要望は、枝が邪魔にならないように切ってほしい、花を咲かせるように切ってほしいなど多岐にわたる。

水越さんの仕事は庭木を手入れするだけではない。手入れに入る前に、刈払機かばらいきという

機械を使って庭木のまわりにある雑草や枝を整える。「いくら植木が綺麗にできて、(庭木の)まわりが綺麗じゃないと綺麗には見えないよね」。庭木以外の手入れは本来、頼まれていることではないが水越さんは自ら手入れをしているという。

水越さんにとってお客さんに喜んでもらえるのも楽しみのひとつだ。仕事が終わったときにお客さんからは「ありがとうございませ」と感謝の気持ちだけでなく、「また次も頼みます」とリピートの声も多い。水越さんの細かな気遣いが、次も手入れを頼みたいという気持ちへとつながっているのだろう。少しの妥協も許さない水越さんから剪定の仕事に対する熱意を感じた。

* * *

水越さんは「好き」を大切に自ら剪定について学び、独学で剪定の技術を身につけていった。「趣味で好きじゃないとできないね」という水越さんの、好きなことを貫くすがたがかっこいい。私も自分の「好き」を大切にできる人になりたい。まずは自分の好きなこととは何か見つめ直してみよう。

次に作ってみたいものはありますかと水越さんにうかがう。少し首をかしげて「サザエさんかな」と笑いながら答えた。これからも水越さんの作品が見られるのだろうかとわくわくする。少し落ち込んだとき、癒されたいと思ったとき、市役所に作品を見に行ってみよう。市役所の建設から56年経った今、市役所はまちの中心となり、水越さんの作品は都留の人びとに癒しを届けていた。



市役所にある水越さんの作品。写真の4つの作品が完成するまで8時間はかかるという。年に2回ほど水越さん自ら手入れをしている(2023年11月15日)

「谷村がひとつになる お祭りでした」

ぎしゅういなりしやれいたいさい
—儀秀稲荷社例大祭—

すがや製菓店を通り過ぎ、つきあつた石畳の道を進んでいくと3つのお寺が並んでいる。いちばん北にあるのが西涼寺だ。昨年まで「儀秀稲荷社例大祭」というお祭りが行われていたという。どんなお祭りだったのだろうか。思い出を持っているかたを訪ねてみよう。



火の用心のお祭り

「儀秀稲荷社例大祭」は、1949年5月13日に起こった谷村町大火がきっかけで始まったお祭りだ。火は谷村のまちをのみ込む勢いだつたが、西涼寺にある儀秀稲荷のお社は焼けずに残った。奇跡ともいえるその出来事から、人びとは火伏せの神として儀秀稲荷を奉ったという。お祭りを立ち上げたのは「儀秀講」の人びとだ。講とは、神仏に参拝



左上：踊り子（1967年5月13日） 右上：儀秀稲荷のお社（1979年5月13日）
下：儀秀講の役員のかたがた（2019年5月13日）

へ行く人の集まりのことをいう。火事の被害にあつたまちで暮らす人を中心に多くの人が講に入り、5月13日には、大火が繰り返されないことと、まちと人びとの安全を儀秀稲荷に願うのだ。

お祭りは1952年から始まり、2023年まで開催していた。しかし、人口減少や講の役員の高齢化で活動が難しくなり、2023年末をもって講の解散式を行った。任職の奥さんである奈良直子さん（52）が、『谷村町大火五十周年記念誌』という冊子を見せながらお祭りについて詳しく話してくださった。お祭りでは、特別祈禱を行うほかに、まちの人びとが楽しめるイベントがあつたという。最近では、ビンゴ大会やカラオケ大会を開催するのが定番だつたが、昔は地方巡りの芸人をよぶなどしてお祭りを盛り上げていたらしい。なかでも人気だつたのは福引きだ。三町商店街のものが景品で、当時では珍しい洋服や洋傘は女性に人気だつた。一等は金の小判で、当選者のなかには身につけて常に持ち歩く人もいたそう。

お祭りの準備

任職の母である奈良幸子さん（87）は、お祭りの思い出を聞かせてくださった。お話しが大好きで、私ができるのを楽しみにしてくれていたそう。テーブルには白黒の写真がたくさん並べられている。

「お祭りの日が近づくと、まちの人や講の人が集まってきた、みんなで準備したんですよ。女の人は慣れた手つきで。はやいこと、はやいこと」と幸子さんは懐かしそうに話し始める。お祭りの準備はすべて手作業で行ったという。幸子さんを含め、女性はお供物の落雁を包んだり、「火の用心ふきん」を畳んだりする作業、お札の準備、食事の用意をしたという。多いときは1200人分のものを用意したらしい。

「子どもたちもお手伝いをしに来たり、80代のおばあさんが楽しみにして来たりもしていました。作業をしながらお話をたくさんして」と幸子さんの言葉から、お祭り前の賑やかなようすが浮かんでくる。「あそこのお稲荷さんの小山から子どもが走って降りてくるころなんて、ビー玉が転がってきているみたいだとみんな言っていました」。ちょうど窓から赤い鳥居が見えていた。今は少しだけ場所が変わっているが、高いところに儀秀稲荷のお社がある。あの坂道のことかな、と想像がふくらむ。

幸子さんは、写真を指さしながら、この人はこんな人で、と私が質問をするまでもなく

たくさんのお話を話してくださった。一緒に当時の写真を見ながら、「でも、火事がきっかけで出来たお祭りなのに、こんなに楽しうなのは少し不思議です」と私が言うと、「亡くなった人がいなかったから。お祭りが始まって、まちの火事も減っていった気がします。あの当時は娯楽もないし、みんなで集まることがいいことだったと思います」と幸子さんは話した。



割烹着と下駄すがたで準備にとりかかる女性たち (1967年5月13日)



配られたお札



火の用心ふきん



すがた製菓店の落雁

このまちは、大火を辛い経験として引きずるのではなく、むしろ、みんなが集まる楽しい機会としてとらえているように見えた。

文化財だらけのまち

幸子さんは、1962年に結婚し、西涼寺のお手伝いをするようになった。幸子さんが都留を訪れたときには、火事の跡は消えて栄えたまちになっていたという。「電車に乗ってこのまちに来たときは驚きました。なんて文化財だらけの場所なんだろうって」と話しながら目をきらきらと輝かせる。

谷村は商業をする家が多かった。有名なのは織物業と染物業だ。それから、当時では珍しい色鉛筆が手に入ったという。「蔵を持つ家も多くて、火事で焼け残ったところもまだありますね」と現在のまち並みにも当時の面影が残っていることを教えてくださった。

お祭りを行ういつぼうで、三町商店街では『「十三」の市』が開催していた。どのお店も張り切って店先に商品を並べたという。「13」という本来なら忌み嫌う数字を「とみ」と読みかえるユニークな発想からは、不吉なことを前向きに捉える谷村の人びとのエネルギー



三町商店街の福引テント。本学の学生が手伝いに
来ていた（2000年5月13日）



福引をするようす（1979年5月13日）

が伝わってくる。ちなみに、『十三』の市」と名前がつく以前には『びつくり大市』というイベントで、まちの外からもたくさんの方が訪れたそうだ。

現在でも『十三』の市」は続いており、毎月13日の朝にはお知らせの花火が上がるらしい。『十三』の市」は谷村が文化の中心であることと、まちの人びとの活気を象徴するイベントだった。

思い出が歴史になっていく

火事するとき子どもだった人びとも今では70代以上だ。「この人はもう100歳になるの。

市から表彰されていました」と幸子さんが紹介してくださいました。「あの山（儀秀稲荷のお社がある場所）へ行くのもひと苦勞の人が増えましたからね」と幸子さんは苦笑いを浮かべる。講のなかには遠くに住んでいるかたもいて、都留でお祭りの準備をすることが難しい。ふぎんやお札を郵送するだけの関わりも増えていったそう。「時代の流れで、いままで家族単位だったのが個人単位になってきているのかな」と直子さんは話す。たしかに、今は一人で解決することが増え、人に頼ることが少なくなつた。生活のなかで隣近所との交流の機会が減っていったのだ。

直子さんは、今はお祭りの資料を整理しているという。「お祭りが復活することもある

のかな。分からないけど、大切な資料だからちゃんと整理しなくちゃね」と微笑んだ。

机に広げられた写真、「火の用心ふぎん」やお札は、「儀秀稲荷社例大祭」という歴史を物語る資料になっていく。思い出が大切に残されていくと思うと、お祭りが終わってしまふ寂しさも少し和らいだ気がした。

* * *

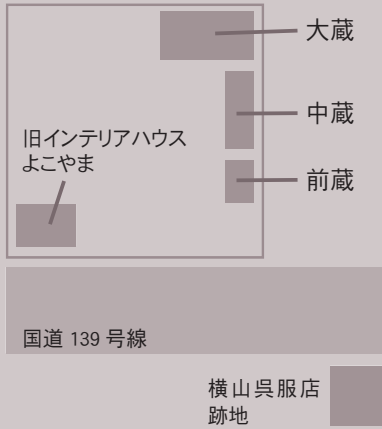
私は「儀秀稲荷社例大祭」に参加したことはない。しかし、幸子さんのお話を聞いて写真を眺めると、お祭りの日の賑わいを想像することができた。じつさいに使われていたものに触れると、人びとの願いが伝わってきた。出来事が終わって、知っている人がいなくなつたとしても「そのとき」を切り取つた記録があれば人びとは歴史を垣間見ることができるときののだ。

お祭りに参加したあのような気持ちのまま西涼寺を出る。境内からは三町商店街を見渡すことができた。帰りは商店街を通つていこう。今はもう見られないお祭りの日を想像しながら、ゆつくりとまちの景色を眺めた。

渡邊結佳（国文学科2年） 〓

横山家の 蔵から

古写真を見ていると、自分が見たことのある空地に、かつて建物があったことに気づいた。その建物について知りたくなり、写真に写る「よこやま」の字を手掛かりに「ヨコヤマさん」を探して谷村を歩く。すると、「インテリアハウスよこやま」と表札に書かれた家を見つけた。あの写真に写っていた建物の持ち主かもしれないと戸をたたいた。



横山呉服店

突然の訪問に応じてくださった横山辰雄さん(75)によると、あの写真の建物は「横山呉服店」という店だと分かった。一階が小間物屋、二階が呉服屋だった。当時の店主は、辰雄さんのお母様だったそうだ。これは大正初期からあった店を昭和3年に立て替えた建物だという。完成時の記念写真を見せてもらう。店の屋上に20名の関係者が並んでいる。左に写るのはかつての市役所だと教えてもらい、まちのようすの移り変わりに驚いた。



横山呉服店の建物が完成したさいの記念写真。左の白い建物が市役所（写真提供=横山辰雄さん）

横山呉服店が創業130年近い歴史に幕を閉じたあと、建物が解体されて現在の空き地になったのだという。辰雄さんは大学卒業後に働いていたデパートの外商（外回り営業のこと）部で培った経験と人脈で、昭和50年10月に「インテリアハウスよこやま」を始めたそうだ。今から10年ほど前に店を閉めるまでは絨毯や家具などを売っていた。店ができた当初は周りに家具を売る店はなかったため、もの珍しかったという。「横山呉服店」を継ぐ形で「インテリアハウスよこやま」ができたと思っていたが、全く別の店だということを知った。

かつて商品だった物は今

辰雄さんの家にお邪魔させていただくと、入ってすぐの玄関に数十個のお皿や湯呑が置いてあった。これらは店に商品として置かれていたものだという。「これは呉服店に置いてたやつじゃないかな」と黒い和傘を見せてくださった。小ぶりだが持ち手がしっかりしている。和服に合わせて使ってみよう。

同じく店に並んでいたと思われる、茶色の編みかばんも見せてもらう。開いてみると、

たくさんの子どもたちが遊んでいるかわいらしい絵が描かれていた。外側の落ち着いた見えた目とは反対に、にぎやかな柄に少し笑ってしまった。時間が経って、絵が描かれた布は色あせているが、それにレトロな面影を感じ、ときめいた。「今度また、うちに来たときにあげるよ」と辰雄さんがおっしゃった。歴史ある物だろうに、頂いてよいのだろうかと思いつつ、なかにおにぎりとお茶をいれてピクニックに行けたらなとも思ってしまった。

家にある小間物はほんの一部で、蔵にはもつとたくさんの物が残っているという。刻された金色の紋を指さす。違い鷹の羽だ。自分の家紋と同じだったので、思わずお椀から顔を上げて、「横山家の家紋ですか。うちと同じです」と伝えた。「そうなの。あなたとはなにかと縁があるね」と笑いながら、今度は赤い漆の器を持ってきた。これにも家紋が刻されている。お椀だけで、この蔵に数百個はありそうだ。

蔵のなか

ある日、自転車で谷村を走っていると、蔵を掃除していた辰雄さんに偶然お会いした。再び突然の訪問に応じてくださった辰雄さんは、せっかくだからと蔵のなかを案内してくれた。外壁の格子模様が特徴的な大蔵は、二階建ての木造で、一階の天井にはまっすぐで太い梁が何本もあった。いくつも重ねて置かれた木箱の側面に、筆で右から左に「横山」と書かれている。文字の間に書かれているのは、屋号だという。隣の側面に「椀」と書か

れている通り、白い布にくるまれたお椀が10個ずつ、すつきりと収まっていた。長机には漆塗りのお椀がずらつと並んでいた。この数からして、家族の食事用ではなく、人にふるまう食事のさいに使っていたのではないかと辰雄さんは言う。「これがね、輪島塗なんだよね。あと、ほら」とお椀の後ろに刻された金色の紋を指さす。違い鷹の羽だ。自分の家紋と同じだったので、思わずお椀から顔を上げて、「横山家の家紋ですか。うちと同じです」と伝えた。「そうなの。あなたとはなにかと縁があるね」と笑いながら、今度は赤い漆の器を持ってきた。これにも家紋が刻されている。お椀だけで、この蔵に数百個はありそうだ。

蔵に残っていたもの



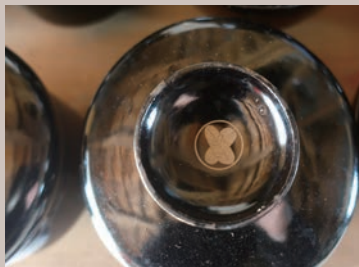
no.1 編みかばん

表面が藤で編まれたかばん。なかには絵が描かれた布が貼られている



no.2 輪島塗の茶碗

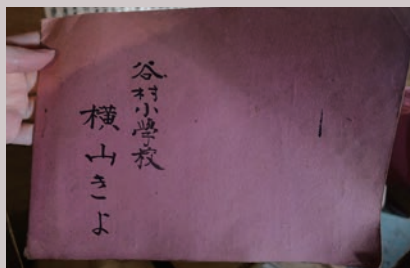
黒い漆塗りの茶碗や赤の漆の平皿があった。裏には金で違い鷹の羽が刻されている



思い出の宝箱

二階のようすを下からうかがうと、日が差し込んでいた一階とは打って変わって、懐中電灯の明かりが無ければ足元がおぼつかないほど薄暗い。ゆつくりと階段を上がってまず目に入ったのは、「横山呉服店」と大きく書かれた、横70センチ、高さ30センチほどの木箱だった。これが、当時店で使われていた衣装入れなのだろうか。どんな服が入っているのかと気になる。しかし、なかに入っていたのは服ではなく、大量の冊子だった。

「これは、私のおばあさんが使ってた教科書だよ」と辰雄さんはあせた紅色の冊子を手にとった。裏表紙には「谷村小学校 横山き



上：辰雄さんのおばあさんが小学生のときに使っていた教科書（2024年1月23日）

下：当時、呉服店で使われていたと思われる木箱（2024年1月23日）

よ」と書かれている。表紙には明治34年とあった。120年以上前だ。冊子を開くと、漢字

と片仮名で書かれた文章が並んでいた。この文体の教科書は、日本史の授業で見たことがある。博物館に保管されていてもおかしくないくらい貴重な物ではないのだろうか。聞いてみると、やはりミュージアム都留にいくつか資料として提供しているという。

私の実家の屋根裏にも小学校の卒業アルバムは残っているはずだが、教科書はこの先見直すことはないかと捨ててしまった。きょうさんも当時は、使っていた教科書が特別な資料になるとは思っていなかっただろう。

辰雄さんが「学芸員の人はこういうのに価値があるって言うんだよね」とふすまに書かれた文字を指さした。文章のようだが、旧字体で書かれているうえに筆字なので読めなかった。なんと書かれているのか聞こうとすると、「俺読めないし価値もわかんないからさあ」と笑って首をかしげていた。私もつられて笑ってしまう。今私たちが書いている文字も、いつかは「読めない」と言われる日が来るのだろうか。文字も歴史を生き延びていることをしみじみと感じた。

no.3 曆

慶應、弘化、嘉永など200年近く前の曆。355日と書かれていることから旧曆だとわかる



no.4

明治34年の小学校の教科書



「小学校毛筆図画帖」は、明治時代の臨画教育（模写によって学習すること）に使用された。自然や生きものの絵が多く描かれていた



中蔵の人形

続いての蔵は最初に入った大蔵よりも天井が低い。奥のほうから辰雄さんが箱を抱えて持ってきた。母親の節句祝いの人形が入っているという。

箱のなかには、顔に白い布が巻かれた2体の人形が入っていた。紺色に上品な銀色の柄の着物と、金色に淡い黄緑の柄の着物を召した人形だ。彩られた光沢は鮮やかに残っていて、布地も古びたようすがまったく無い。大切に保存すると、「ここまできれいに残るのか。うちの屋根裏にある雛人形は、いつしか目の見なくなってしまうている。今はどんなすがたなのだろう。お内裏様が何色の着物を着ていたのかも忘れてしまっていた。実家に蔵はないけれど、思い入れのあるものを残していきたいと強く思った。

顔に巻かれた布を外すと、男雛と女雛ではなく白髪のおじいさんとおばあさんだった。実家の人形と比べて渋い着物の色だとは思っていたが、この人形も雛人形なのだろうか。あとから調べてみると、この2体は「高砂人形」といい、長寿と夫婦円満の縁起物だとい

うことがわかった。このほかにも小さな人形が布にくるまってたくさん箱に入っていた。

このなかからお内裏様を見つけ出すのは大変だ。「いつか人形を全部並べて飾りたいね」と辰雄さんが言う。お内裏様の人形との対面は、のちの楽しみにとっておくことになった。

受け継ぐ

退職したことをきっかけに、本格的に蔵じまいを始めたという辰雄さん。多くの物が残る蔵を整理している。輪島塗の茶碗を手にとって、「もしよかったら、これもあなたのご実家に送るよ」と辰雄さんが言う。頂いてよいのかとためらうと、「こういうのつて、使ったときに息を吹き返すから」と返された。使われていた物が蔵に眠り、人の手によって再び使われたとき、物が息を吹き返す。それははいねいに保存してきたからこそだ。かつての使い手でなくとも物に込められた想いを受け継ぐことはできる。辰雄さんに頂いた物を大切に使うことでそれを証明したい。自分の想いが、いつか他の誰かに渡ったときのために。

原口桜子(学校教育学科2年) 文・写真

no.6 茶壺と茶道具

鉄瓶と茶釜はどちらも南部鉄器で、片手で持つと体が傾くほど重たかった。鉄瓶は蔵で見つけてから、下の写真のように湯を沸かすのに使用しているという



鉄瓶



茶壺



茶釜

no.5

茅葺き屋根の飾り台

旧インテリアハウスよこやまの二階にて。辰雄さんは、雛人形を飾っていたのではないかと話す



古地図を頼りにまちを訪ねてみると
そこに載っていなかったものにも気づきました。
人びとの暮らしをゆったりと見守るかちゅうがわ家中川の音
見る人の気分を明るくしてくれる庭木の作品
たくさんの思い出が眠る蔵のひんやりとした空気

そしてなにより、そこに暮らす人びとに出会い、地域の人のために
あるいは歴史を受け継ぐために動いているすがたを知りました。

歴史は紙の資料だけでなく
その時代を生きる人びとの語りとなって受け継がれています。
私たちが都留を記録することの本質は、資料を未来へ残すことだけでなく
今を生きている都留の人びとや自分たちの気持ちを確認することなのだと思います。

古地図を手に、
まちを訪ねる



横山辰雄さん (2024年1月23日)



センサーカメラが 写した動物たち

『フィールド・ノート』編集部では、キャンパス内の森にセンサーカメラ（赤外線を感知すると自動的にシャッターを切るカメラ）を設置して動物の生息調査をしています。今号では前号と同じ場所である、『ムササビの森』にカメラを2台設置しました。1月19日と2月10日に撮影された動物たちを紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



① **キツネ** (2024年1月19日)
カメラにキツネが写るのは久しぶりです。録画を見ると、辺りを見渡して森の奥へ去っていくようすが確認できました。ふさふさとした長い尻尾が印象的です。

③ **ニホンジカ** (2024年1月19日)
立派なツノを持ったニホンジカがやってきました。オスのニホンジカです。目を光らせて、カメラをじっと見つめていました。

② **タヌキ** (2024年1月19日)
2匹のタヌキが仲良く歩いています。別の日にもタヌキが通りました。あたりをキョロキョロと見渡しています。今回、もっとも多く写った動物です。

④ **ニホンジカ** (2024年2月10日)
2月5日に雪が降ってしばらく経ったこの日、メスのニホンジカが写りました。カメラがくもり、シカの影だけが見えます。積もった雪に足跡を残していました。

コラム
ふれられる
展示スペース

本学4号館1階にある地域交流研究センターには、本誌の編集室のほかに、キャンパス周辺で出会える動物の食べあとや足跡などを展示したスペースがあります。今回は展示物のなかから、さわれるものの一部をご紹介します。

ニホンリスの食べあと

ニホンリスはマツボックリやクルミ、ドングリなどが好みます。丈夫な前歯で器用に食べます。ムササビの森には動物の食べあとがたくさん落ちています。クルミの表面と内側の触感の違いや、マツボックリのざらざらとした手ざわりをぜひ楽しんでみてください。



ざらざらしてる！



ムササビがくらす^{うろ}洞

ムササビがくらしていた木の穴です。洞は、枝が折れたところに細菌や雨水などが入り、徐々に腐ってできます。ムササビに適した洞は、ふつう大きな木にしかできません。大きな木は洞のなかの空間が大きく、寝ぐらや子育てをするのに最適です。



テントウムシの冬

本誌の過去号では、本学で越冬するテントウムシについて何度か取り上げている。今年も変わらず、テントウムシは越冬しているのだろうか。過去の記録と比較してみたいと思い、観察に向かった。

今年の冬は

本学の自然科学棟には、毎年10月下旬から11月にかけて、テントウムシが越冬にやってくる。なかでもナミテントウは数が多く、集団で冬を越す。1980年代には、自然科学棟全体で10万匹以上が越冬していたという記録がある。しかし、その数は年々減っている。2021年には、100匹ほどだったという。今年も、相当少なくなっているかもしれない。

まずは、越冬しているテントウムシをひと目見たい。1月10日に自然科学棟へ向かった。さっそく、1階の壁に1匹のテントウムシを見つけた。すぐそばには外階段がある。階段の下から見上げると、壁の細い溝やつき当たりの角、天井にいくつもの黒いかたまりが見えた。「本

当に集団で越冬するんだ」。白い壁にある黒いかたまりはとても目立つ。これほど人目につく場所で冬を越す生きものがいるのだ。私が大学と家を行き来しているときも、テントウムシはどこかでひたすら春を待っているのだろうか。

自然科学棟のテントウムシ

1月27日は、日差しがあつて暖かかった。今日は、自然科学棟の最上階である6階まで上ってみよう。4階から5階へ上っていくと、階段を1匹で歩いているテントウムシがいた。うっかり踏んでしまうところだった。しゃがんで顔を近づける。黒い背中にある赤い点を二つもつテントウムシだ。日光が当たっている明るいところから暗いところへ、ちょこちょこ移動していく。冬のあいだ、一か所ですべてとしていくわけではないようだ。これから集団に合流するのだろうか。

足元、床のすみ、階段の両脇、天井を注意深く見ながら上っていく。どの階にも黒いかたまりがある。テントウムシは何階を目指して飛んでくるのだろうか。6階まで上りきり、今度は下っていく。すると、階数が下がるにつれて、集団の数が増えていくことに気がつ

いた。そして、一集団の大きさは小さい。1匹でいるテントウムシもちらほら見かける。上に行くほど集団は大きくなり、テントウムシが密集している傾向があるようだ。

2月7日、2日前に降った雪が残るなか、自然科学棟へ向かった。寒いから、テントウムシは集団でじつとしていないはずだ。しかし、階段を上り始めるとすぐに、そうではないことに気がついた。前回観察した暖かい日より、多くのテントウムシが床を歩いているのだ。動きまわったら、冬を越せなくなってしまうのではないかと心配になった。私のほうがよほど、寒さに身を縮めている。

今回は集団ごとの個体数を数えてみる。自然科学棟の壁には、縦幅が1.5センチほどの細い溝がある。2センチ四方に6匹。5センチくらいの間隔には20匹。手の届くところ



自然科学棟の天井で越冬するテントウムシ (2024年2月14日)



- ①黒地に赤い点を2つもつナミテントウ。キャンパス内でいちばんよく見かける(2024年1月27日)
 ②赤地に黒い点をたくさんもつナミテントウ。橙色の個体もある(2024年2月7日)
 ③三日月のような形の斑紋をもつテントウムシ。にやりと笑っている顔のようだ(2024年2月14日)
 ④自然科学棟で唯一出会ったナナホシテントウ。階段の角でじっとしていた(2024年2月14日)

には定規を当てて、天井はおおまかに数えていく。数えているあいだに、もぞもぞと動きだす個体もいる。数を数えることに夢中になって、足元のテントウムシを踏んでしまわないように注意する。平均すると、1センチ四方に約2・5匹のテントウムシが集まっていることがわかった。

キャンパス内のテントウムシ

テントウムシは、白色をほかの色と見分けることができるといわれている。乾燥している越冬に適している場所だと判断し、白い建物に集まってくるらしい。キャンパス内にあ

る、自然科学棟以外の白い壁の建物にも、テントウムシはいるのだろうか。

美術棟は昨年塗り替え工事が終わったばかりで、きれいな白い壁をしている。道路を挟まずに栗山と接している建物だから、テントウムシが飛んできやすそう。自然科学棟と条件は同じに思える。まわりをぐるりと一周してみるが、テントウムシはいない。

6階まである2号館の外壁も白い。授業中にテントウムシを見かけたという編集部員とともに、西向きの窓がある廊下を見に行く。6階でさえも、窓枠や床をテントウムシが歩いている。いったいどこから室内に入りこんでいるのだろう。グラウンドに面した小さなベランダでは、複数のテントウムシが歩きまわっていた。外壁にも数匹見つけた。

ほかの建物にも、テントウムシはやってくる。2号館には、活動している個体がいなかった。越冬している集団を見ることができなかった。白い壁だけがテントウムシが集まる理由ではないようだ。

テントウムシが2号館に集まってくるのは、日当たりが良いからだろうか。そう考えると、美術棟で1匹も見当たらなかったのは

不思議だ。美術棟は自然科学棟より高いところにあり、日光をさえぎる建物がない。そのため、道路側の外壁にはよく日が当たる。

また、過去の記録と異なっているのは、カメムシなどのほかの昆虫が見当たらないことだ。見落としているのかもしれないが、足元を歩いているのはテントウムシばかりだった。キャンパスのようすは少しずつ変わってきている。昨年は新しい建物が完成し、最近には自然科学棟に面した道路で工事が行われている。天候だけでなく、環境の変化も昆虫の生活に影響を与えているのだろうか。

* * *

調べれば調べるほど、疑問は増えていく。今までは、テントウムシを見かけても気に留めなかった。私にとって、それだけ身近な昆虫だったということだ。冬に昆虫たちをあまり見かけなくなっても、かれらがどう過ごしているかなんて、考えたことがなかった。テントウムシは自然のなかだけでなく、人がつくった建物でも、寒さに耐えて春を待っている。暖かい季節にテントウムシと再会したら、「お疲れさま」と声をかけたくなった。

印南響(比較文化学科1年) 文・写真

手作りを楽しむカフェ

かせい
禾生 駅近くにある「ギャラリーカフェ禾菜」を訪ねた。カフェ禾菜は私の祖父である北原種明さん(78)と久保田公子さん(70)が営んでいる。種明さんと公子さんは本誌の読者であり、温かく迎えてくれた。

北原日々希(地域社会学科1年) 文・写真
谷上碧(地域社会学科1年) 写真



カフェ禾菜を営む公子さんと種明さん。「こんな感じでいいかな」とカメラの前に立ってくださった(2024年2月12日)

こだわりの料理

お店に入ると、織物や版画が目に入る。種明さんと公子さんが自ら作った作品だという。まじまじと見入ってしまった。あとでゆつくり見させてもらおう、と席へ向かう。席に着くと、水の流れる音が聞こえてきた。窓の外を見ると、小さな水路がある。店の名の「カナー」は、アラビア語で「水路」という意味があるのだと種明さんが教えてくれた。

種明さんが手づくりのメニューを持ってきてくださった。「スパイスいっぱい」という説明が目に留まり、ヘルシーアジアナイスのランチセットと黒糖ココアケーキを頼むことにした。ランチセットはホットコーヒーがつく。料理を注文すると、キッチンにいる種明さんと公子さんがぎびぎびと作業に取りかかる。しばらくすると、炒めた野菜とスパイスの香りがしてきた。急にお腹がすいてきたのがわかる。

ヘルシーアジアナイスが運ばれてきた。スプーンですくって口に近づけると、スパイスの香りを強く感じる。クミンやナツメグなどを使っているようだ。なんとなく東南アジアの情景が頭に浮かぶ。

ヘルシーアジアンライスを平らげると、ほどなくしてコーヒーと黒糖ココアケーキが運ばれてきた。一口食べてみると、やさしい甘さがふんわりと口に広がる。コーヒーの苦みと合う。

ケーキに舌鼓をうっていると、種明さんが「このケーキの材料は全部植物性のものなんだよ」と教えてくれた。植物性のものを使うことによつてカロリーを抑え、お客さんに気兼ねなくケーキを食べてもらえるようにしているのだという。カフェ禾菜の手作りランチには、お二人のお客さんに対する気づかいがまつていた。

ふれあいの場として

カフェ禾菜は、月曜日のみ営業している。他の曜日は何をしているのかと尋ねると、お二人は笑いあいながら「けっこう忙しいんだよね」とおっしゃった。お二人は、道志村にも住まいを持っており、都留と道志を行き来しているという。都留市と道志村は隣接しているものの、あいだを結ぶ道は険しく、往來に時間がかかる。それなのになぜ2拠点での生活をしているのだろうか。

聞いてみると、道志で自然に触れて趣味の織物作りや陶器作りに励みつつ、都留のカフェな

どを訪れているのだという。カフェ禾菜を開こうと思ったのも、都留のさまざまなカフェを訪れ、自分たちもやってみたいと思ったからだそう。「都留には美味しくて特色のあるお店がいっぱいあつて、けっこう刺激をうけているんだよね」と公子さんが教えてくれた。種明さんも「他のお店に負けないように頑張ってるよ」とおだやかに笑いながら話す。その笑顔から「負けなように」と言いつつ、都留のカフェに親しみをもっていることが伝わってくる。

お二人は、お客さんとのふれあいの場としてもカフェ禾菜を活用している。種明さんと公子さんの作品を披露する展示会や、楽器教室などを定期的に行っているという。オープン一年を記念して5月に開いた展示会は、たくさんのかたが訪れ、交流を楽しんだそう。この展示会を通して、より多くのお客さんがカフェ禾菜を訪れてくれるようになったという。「みなさんといろんな形で交流を楽しんでいきたい」と種明さんが話す。

今後は、もつと市民のかたや学生と語り合いの場を持ちたいと考えており、そのための催しを計画しているのだそう。お二人のアイデアは尽きることがないようだ。



添えてあるクリームは豆乳ヨーグルトから作られている



野菜たっぷりのヘルシーアジアンライス

自分の身体で感じる(じぶんこ)

種明さんと公子さんは、カフェ禾菜の活動のなかで、「身体感覚」を大切にしているという。「自分の五感をじつさいに使っていくのがポイント」と種明さんは話す。とくに手作りのよさを追い求めているという。「手の感じが残る料理や作品と出会ってほしいんです」と公子さんが自分の作品に目をやりながら語った。たしかにこのカフェには手作りのものがあふれている。手作りの温かみを感じられる場所だ。



カリンバを演奏する種明さん。店内にやさしい音色が響く

「便利なものが必ずしも全部いいものとは限らない。いろんなことを自分で体験してほしいんだよ」と種明さん。そうした理由から、SNSを使った広報などをしていないという。「このカフェも、看板や人づてで広まったんだよ。そういうつながりを大切にしたいね」と公子さんが続けて語った。お二人が人とのつながりを大切にしていることが伝わってくる。

カフェ禾菜では、月に1、2回「カリンバ」というアフリカの楽器の教室が開かれている。もともと音楽が好きだった種明さんが、アフリカ音楽に関心を持ったのがきっかけだ。アフリカの人びとが、身近で簡素なものを使って音を奏でるように惹かれたのだという。この教室で使うカリンバも、簡素なつくりだ。「いろいろな音楽をすぐ聴ける時代だけど、なかなかアフリカの音楽に触れる機会はないよね」と種明さんが語る。口伝でメンバーが増え、今は6人ほどでカリンバを奏でている。「みんなでやるといつそう楽しい」と公子さんがにっこり笑う。

* * *

種明さんと公子さんは、自分たちの手でものを作り出すことにこだわっている。「自分た



種明さんと公子さんが作った陶器や織物、版画が並ぶ

ちで作るからこそ、ものに深みが生まれるし愛着が湧く」と公子さんが教えてくれた。

なんでも簡単に手に入る世の中だからこそ、お二人の言葉が胸に響く。私はそういった環境に甘え、自分の身体を目いっぱい使うことの楽しさとやりがいをおぼれていた。カフェ禾菜で、お二人の想いが込められた作品に触れ、私も自分の手でものを生み出してみたくなった。

「ギャラリーカフェ 禾菜」

営業日時 月曜日午前11時～午後5時

電話 070-4488-0804

フィールド暦

都留に冬がやってきました。ほかの時期と比べて動植物を見かける機会が少ない季節ですが、耳を澄ませたり、目を凝らしたりすると冬の自然と出会うことができました。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



ヤマガラ

シジュウカラの仲間で、スズメほどの大きさです。オレンジ色の体が特徴です。本学にはエゴノキが多く、秋ごろからエゴノキの実を食べるすがたが観察できます。

(2024年2月22日 本学美術棟裏)



ツグミ

都留では冬によく見かけます。越冬するために日本にやってくるようです。夏には鳴き声が聞こえなくなる(口をつぐむ)ことに名前が由来するという説もあります。

(2024年2月29日 本学うら山)



ジョウビタキ

体が茶色で翼に斑点があるのが特徴です。冬の訪れを教えてくれる鳥です。「ヒタキ」とは、火打石を叩く音に似た音を出すことに由来するそうです。

(2024年1月25日 本学図書館横)



ニホンジカの足跡

ニホンジカの足跡はよく見かけますが、雪が深かったため、ふだんは見られない副蹄(写真の○印)の跡がついていました。副蹄は、人間の人差し指と小指に相当します。

(2024年2月27日 本学うら山)



ノネズミの足跡

雪のなかに開いた3センチほどの穴から遊歩道を横切るように足跡が続いていました。後ろ足の前に前足の足跡がうっすらと残っていました。

(2024年2月27日 本学うら山)



キツネの足跡

キャンパスでもキツネの足跡が確認されました。雪上に一直線に残る足跡がキツネの特徴です。センサーカメラ(P.26-P.27)もご覧ください。

写真撮影・提供=国際交流センター 前田文字さん
(2024年3月1日 本学4号館)

はなちゃんのカフェ & ショップ

～笑顔から生まれる人の輪～



①カフェは、「富士みち」と呼ばれる国道 139 号線沿いにある。外のショップでは、同じ事業所で製作している漬物やジャム、都留で作ったお米や果物などを販売している。右奥には、大きなピザ窯もある(2024年1月23日)

②店内の様子(2024年2月8日)③人気メニューのマルゲリータピザ。野菜たっぷりのサラダ付きだ(2024年3月2日)

すてきな出会い

『はなちゃんのカフェ&ショップ』は、今年でオープン11年目を迎える。障がいをもちながらも働く意欲のある人たちが、接客を通して社会と関わることで、自立を目指す場だ。

12月中旬、可愛いらしい名前からお店が気になり、自宅の近くにある『はなちゃんのカフェ&ショップ』に行ってみることにした。愛らしい猫の看板がお店の目印だ。店内に入ると、店員さんが「いらつしやいませ!」と元気に迎えてくれた。気持ちのよい挨拶に、自然と笑顔になる。店内には、色鮮やかな造花があちこちに置かれていて、ゆつたりとした音楽も流れている。庭園のようなカフェの雰囲気心が癒される。

車麩くるまぶのフライがメインのはなちゃんランチを頼んでみる。すると、ポリウム満点で、デザートまで付いてきた。カフェの料理には、自家栽培の野菜を使っているという。そして、コーヒーカー紅茶の温かい飲み物も選べる。紅茶のフルーティな香りに包まれると、居心地がよくなりウトウトしてしまった。ふ

と、私を接客してくれた店員さんと目が合った。にっこりとした笑顔に魅了され、思わず話しかけてみた。

店員の太田おおたさんは、はなちゃんカフェについてさまざまなお話をしてくださった。さらに会話は弾み、カフェの2階を案内していただいた。2階は天井が高く、1階と同様に花の装飾で溢れている。

あつという間に時間が経っていた。喋ることが楽しくてカフェで過ごす時間が心地よい。太田さんのほかにどんな店員さんがいるのだろう。すてきな店員さんとの出会いで、カフェのことをもっと知りたくなる。

後日、私は、はなちゃんカフェと一緒に活動させていただくことにした。

それぞれが活躍

1月16日にはじめてカフェの活動に参加した。店員さんたちの仕事は、おもに接客だ。掃除や電話の対応、外のショップの店番、お客さんのコーヒーカー紅茶を用意するなど全員で行う。

さっそく、店員の滝口たきぐちさんが外のショップの店番をしている。店内の入り口付近でお客

お仕事のようす

レジの点検作業をする太田さん。慣れた手つきでお金の確認をしている
(2024年1月23日)



自身が作った呼び込み用の看板を持つ藤村さん。看板は、ほかにも数種類ある
(2024年1月16日)

給食を準備中の小山さん。この日のメインは、さつまいもの入った大きなかき揚げだ
(2024年1月23日)



人気メニューのピザを作る小野田さん。石窯で焼いたピザは大きくて食べ応え抜群だ
(2024年1月23日)

お客さんのコーヒーを入れる滝口さん。できたてのコーヒーは、温かくて香りも良い
(2024年1月23日)



さんが来ないかうかがっているようだ。歩道に人が通ると気になってしまうそう。

外では、寒いなかカフェへの呼び込みも行っていた。そのさいに使う看板は、店員の藤村さんと職員のかたが作ったものだ。一生懸命作った看板を嬉しそうに見せてくださった。どれもカラフルでわくわくする色使いだ。

店内に戻り、店員さんが接客をするすがたを見つめる。お客さんをよく見て、行動を予想しながら対応していた。以前に接客してくださった太田さんは、会計のときにお客さんと楽しそうにお話をしている。そんな太田さんも、働き始めたころは緊張していたそう。

仕事をしていくなかで、多くのことを学んだという。今では、職業実習でカフェにくる高校生にコーヒーの入れかたを教えるのも太田さんの仕事だ。

お昼になると、店員さんや同じ事業所のかた向けに提供している給食をいただいた。担当して8年目の小山さんが中心に作っている。給食作りは大変だけど、メニューを考えるのが楽しく、みんなから「ごちそうさまでした」と言われるのが嬉しいそう。小山さんは今までの献立を3冊のノートにまとめている。イラストも描き込まれたノートからは、料理が大好きなことが伝わってきた。

店員さんのなかには、カフェの料理を担当するかたもいる。小野田さんは、お店の人気メニューであるピザを作っている。生地作りから具材をのせる過程まで、キラキラとした表情で楽しそうに話してくれた。

ほかにも店員さんたちには、個人で担当するさまざまな仕事がある。一人ひとりが自分の役割を理解し、誰かが仕事を忘れてしまっていると、それに気づいた人が、優しく教えている。

カフェでの活動を通して、店員さんたちが自身の得意なことや好きなことで活躍しているすがたを間近で見ることができた。

接客を通して

カフェには、幅広い年齢層の人が訪れる。山梨県内だけでなく、静岡や八王子^{はちおうじ}、埼玉の所沢^{とこざわ}から来てくださるお客さんもいる。太田さんと外の店番をしていると、近所のかたに「頑張つて」と声を掛けていただいた。仕事を通して、励ましをいただくことも多いという。地域のかたやお客さんからの嬉しい言葉がカフェでの活動を支えているようだ。

店員さんがお客さんにコーヒーを準備している時間は、店内にほろ苦い香りがただよっていて気持ちが良い。じつさいに、太田さんから教わりコーヒーを入れてみる。細かな手順が多く、思ったように入れない。店員さんの手ぎわの良さがよく分かる。太田さんは、何度も練習を重ねてやつとできるようになったという。

接客は、もちろん大変なことも多い。しかし、店員さんたちは、お客さんとコミュニケーションをとっているときが仕事のなかでもとくに楽しくて好きな時間だという。人と人とのつながりが生まれることが仕事をする原動力となっているのだろう。

人柄に惹かれる

カフェに行くたびに、店員のみなさんは変わらない元気なあいさつとニコニコした笑顔で迎えてくださる。

活動をしていくと、すぐにみなさんとの距離が縮まった。今日の給食のメニューを教えに来てくれたり、自分で作ったお弁当を誇らしげに見せてくれたり、好きな食べ物の話もしたりした。それから、自分の苦手なことを少しずつ話してくださった。

あるとき、太田さんと話しながら、お持ち帰りのピザに付けるメッセージカードの色を



店員のみなさん。左から、小山さん、小野田さん、藤村さん、太田さん、滝口さん（2024年1月23日）

塗っていると、小山さんも会話に加わった。二人がたくさんおしゃべりしてくださるのが楽しくて、話に花が咲く。自然と仲の良い関係になれたようで心が満たされる。

みなさんとお話をしているとんだか心がぽかぽかしてくる。カフェの雰囲気と心のあたたまりも合わり、リラククスできる。活動させていただくたびに思い出が増えていき、さらにカフェに行くのが楽しみになった。



はなちゃんカフェで過ごす時間が心とからだを癒すのは、店員さんたちのあたたかい人柄が接客に表れているからだろう。店員として一緒に活動をさせていただくことで、カフェでの仕事についてだけでなく、店員さん一人ひとりの魅力を知ることができた。

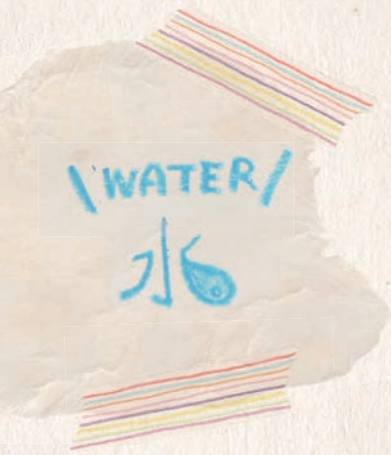
また、はなちゃんカフェは、店員さんたちのすてきな笑顔から、出会いが生まれる場所もある。私の身近なところで、人とかかわりを楽しみ、大切にしながら働いている人がいることを気づかせてくれた。これからはなちゃんカフェとそこで働く店員のみなさんは、人との輪を広げていくのだろう。

つるアルバム 龍にまつわるもの



今年辰年です。龍は水神として崇められてきました。また、龍が天高くのぼるようすから、運気上昇の機運があるともいわれています。「水」神であり、「天高く」のぼる龍にちなんで、私たちが撮った写真をアルバムにしてお届けします。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



屋根の上に積もった雪が溶けて、おもろい形になっ
てました。丸っこく可愛かった



原口桜子（学校教育学科2年）



原口桜子（学校教育学科2年）

毛17口で撮ると
光と影が
はっきり見えた



今年は雪の日が多いなあ



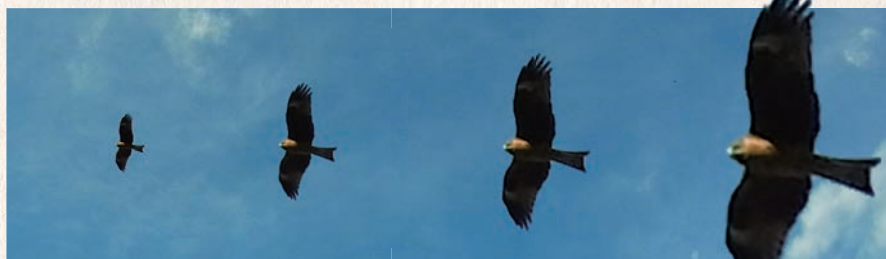
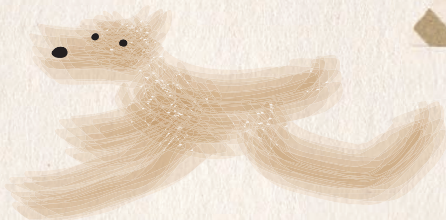
谷上碧（地域社会学科1年）



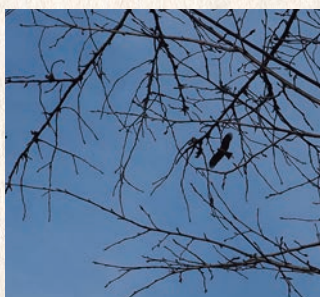
原優希 (国際教育学科 2年)

雲が犬に見えた!

見上げてみる



原口桜子 (学校教育学科 2年)



印南響 (比較文化学科 1年)



渡邊結佳 (国文学科 2年)

ホテル「分ん」 in 赤坂



原優希 (国際教育学科 2年)

番外編

ホテル中華料理屋「分ん」

「龍」がついてるから中心

DRAGON



横山幸乃 (国文学科 1年)



久永奈央 (地域社会学科 1年)



高橋美唯 (地域社会学科 1年)

↑ お散歩中に立ち寄った城南公園。



|| 春が近づいて花の季節 ||



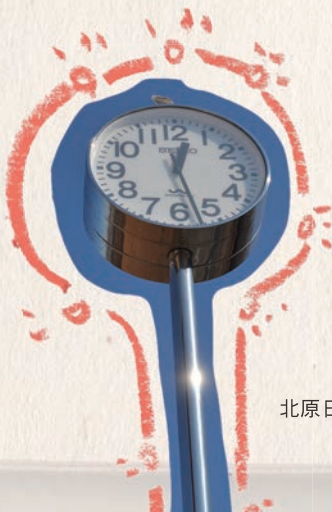
原口桜子 (学校教育学科 2年)



横山幸乃 (国文学科 1年)



根本菜桜 (比較文化学科 1年)



北原日々希 (地域社会学科 1年)



つるを味わう

— 旬の味 水掛け菜 —



お雑煮

水掛け菜のほろ苦さに、だしの甘みがよく合います

水掛け菜を茹で、食べやすい大きさに切ります。茹でたお餅と、水掛け菜をお椀に盛り、かまぼこ、にんじん、油あげの入ったすまし汁を注げば完成です。



お漬物

水掛け菜のシャキシャキとした食感、塩気と苦味で白ごはんが止まりません

ポリ袋に水掛け菜、塩、鷹の爪を入れて、重しを乗せ、一晩寝かせます。取り出して水気を絞り、食べやすい大きさに切ると完成です。

水掛け菜は十日市場、夏狩で栽培される、都留市の名産品です。湧水を田んぼに引き込み、掛け流して育てることが名前の由来です。冬にししか味わえないう水掛け菜を、お雑煮とお漬物にさせていただきます。

横山幸乃（国文学科1年） 文・写真



スーパーで売られている水掛け菜。根を水に浸しておくで長持ちするそうだ（2024年2月11日）

歌と重ねていく



私は本誌の編集部員として活動するかたわら、管弦楽団に所属している。演奏会で披露した都留市民愛唱歌『今、生きてます』の歌詞に惹かれ、詳しくお話を聞いてみることにした。
久永奈央（地域社会学科1年）=文・写真

歌ができるまで

この歌について話をしてくださいしたのは、本学管弦楽団の常任指揮者である吉田悟先生（71）だ。『今、生きてます』はもともと、1994年に都留市制40周年を記念してつくられたものだ。市民の皆さんから歌詞を募集し、最優秀賞に輝いた前田誠一郎さんの作詞に、作詞家阿久悠さんが補作として加わり歌詞が完成した。そこに作曲家小林亜星さんが曲をつけ、都留市民愛唱歌『今、生きてます』が誕生したという。

そして、私たちが使用するオーケストラの楽譜ができたのは、本学のうらてにあるうぐいすホールで開催した都留市民第九演奏会がきっかけだった。当時、都留市には10団体ほどの合唱団があり、都留文科大管弦楽団とともにベートーヴェン作曲の『交響曲第九番*』を演奏することになった。もともと、歌のみだった『今、生きてます』だが、せっかくなら管弦楽団も一緒に演奏しよう、と、オーケストラの楽譜も作られたそうだ。それから、毎年欠かさず第九演奏会では『今、生きてます』を演奏するようになった。

しかし2020年、2021年は新型コロナウイルス感染症により演奏会が中止となった。2022年は演奏会自体は開いたものの、時間短縮のために、愛唱歌を演奏しなかつたそうだ。そして、2023年は4年ぶりに『今、生きてます』を演奏することになったのだ。

4年ぶりに響く歌

2023年12月17日、都留市民第九演奏会が開催された。オーケストラの音色がうぐいすホールに響き渡る。演奏しながら、コロナウイルス感染症によって音楽を披露する機会が奪われ続けていた、この数年間を思い出した。演奏会やコンクールが次々と白紙になつていくあの時間はとても長かつた。それは、小中高と吹奏楽をしていた私が演奏を聞いてもらえることを当たり前だと感じていたからだろう。たくさんの演者とお客さんで作り上げる演奏会という場所が、私は大好きだ。たくさんの人と音楽を共有できる嬉しさがわきあがつてきた。

この演奏会の最後を飾るのが都留市民愛唱歌『今、生きてます』だ。ゆつたりとした

テンポにのって、メロディーが伸びやかに響く。爽やかで飾らない都留の自然が思い浮かぶ。客席を見ると、目を細め音楽にひたるような表情で演奏を聴いてくださるお客さんが目に入った。いったいどんな気持ちで聴いてくださっているのだろうか。

歌と重ねていく

吉田先生は「合唱団の人は歌詞カードを見ずに歌えるし、演奏会が終わったあとに、この歌の名前を聞きに来る人がいるんだよ。素直な歌だし、もつと知名度があがってほしいね」と笑顔で話した。音楽でつながりたいという先生の気持ちが伝わってくる。

じつは、本番の日に舞台にあがっていたのは都留市民だけではない。オーケストラのメンバーとして、当楽団のOBやふだんから団員を指導してくださっているプロも混ざって演奏している。音楽は形があるものではないけれど、人が集うことで音楽がたぐいもの確かめることができる。思い通りにいかなかった時間があったからこそ、そう思える。毎年同じ場所で、都留を思いながらひとつの歌を共有する場に加われたことが誇らしい。

団員の数名にも話を聞くと、印象に残る言葉があった。「同じ曲を長年演奏していたとしても、毎年思い入れが変わると思う。きつと、この曲に一年間の頑張りや都留での生活が積み重なっていきよね」。その言葉を聞いて演奏会のときに見たお客さんの表情を思い出した。あのととき、それぞれの目にそれぞれの都留の景色が広がっていたのかもしれない。「四年間、この都留で過ごすからこそ、解像度の高い都留が思い浮かぶような『今、生きてます』を演奏していきたいね」と話す団員の笑顔がまぶしい。一年後、この曲を演奏するとき、私はどんな都留の風景を思い浮かべるだろう。まだ知らないこのまちの一面に出会いたくなってきた。

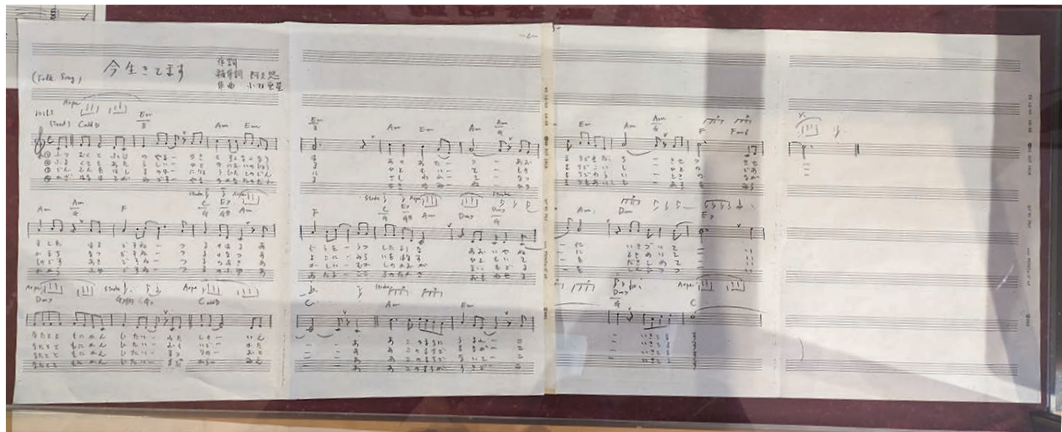
* * *

歌の成り立ちや演奏に関わる人の想いを知り、あらためて演奏すると、都留での一年間がよみがえってきた。新生活に緊張していた春。友だちとの出会いにときめいた夏。祭りでおめかしをした谷村やむらのようすに心が躍った秋。都留での生活が少し楽しみになるような歌と出会った冬。都留で感じたことが音と

なって、楽譜に彩りを加えていくのだろう。都留の人びとにとつて、この歌と都留での生活は、共に重ねていくものなのかもしれない。私はこれからも、文字に残すまでもないほどのささやかな思い出を大学生活として積み重ねていくだろう。その四年間は、『今、生きてます』に重なっていきはずだ。このまちで歌い継がれる『今、生きてます』という曲名の意味が手に取るようにはつきりした。都留に響くこの歌は、今日もまちの人びとと共に生きている。



管弦楽団の練習のようす@青藍会館 (2024年2月17日)



うぐいすホールのロビーに飾られている『今、生きてます』の楽譜（2024年2月7日）

都留市民愛唱歌『今、生きてます』

作詞・前田誠一郎 補作・阿久悠

作曲・小林亜星

一、ふりむくと富士の山

雪も少なくなりました

春です ね 都留の春

あなたとともに感じたい

私の家は ああた

青空をうつつしたような青い屋根

ああ この街に生れ この町で育ち

季節 季節に 息づいて

今 生きてます

二、古くも 新しい

人の匂いの城下町

夏です ね 都留の夏

あなたとともに感じたい

おもいで語る人もいて

その横に未来を話す人もいて

ああ この街で学び この町で恋し

人の出会いに ときめいて

今 生きてます

三、田園を走るのは

二両仕立ての電車です

秋です ね 都留の秋

あなたとともに感じたい

まつりの音に 誘われて

懐しい昔の顔が 舞い戻る

ああ この街で泣いて この町で笑い

時の流れを 抱きしめて

今 生きてます

四、風花は 手紙です

山の彼方の誰から

冬です ね 都留の冬

あなたとともに感じたい

窓から見える 雪の峰

陽の当る心の高さを思わせる

ああ この街が好きで この町を愛し

明日を 未来を 信じつつ

今 生きてます



QRコードを読み取ると、都留市民愛唱歌『今、生きてます』のYouTubeサイトを見ることができます。

ムササビ観察日記

本学の地域交流研究センターでは、都留市のシンボルであるムササビの観察を行っています。キャンパスのうら山に2008年に巣箱を、2013年にムササビライブカメラを取り付けました。本学のホームページでは『ムササビライブカメラ』ページからムササビの巣箱のなかをご覧ください。今号では、2024年1月のムササビのようすをお伝えします。

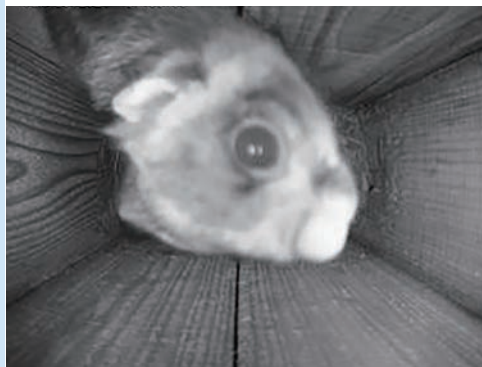
『フィールド・ノート』編集部=文・写真

1月10日 大きく伸び



毛づくろいの途中で伸びをしています。ムササビは夜行性で、昼間は巣箱で眠ります。この日は16時40分ごろに動きだし、30分以上も毛づくろいをしていました。

1月10日 ムササビの顔



ムササビがカメラに顔を近づけています。顔の輪郭に沿って、白い帯状の模様があるのがわかります。目がくりっとしていてかわいらしいです。

1月17日 巣箱を出る



2匹仲良く巣箱に入っていました。1匹が今にも巣箱を出ようとしています。もう1匹はそのようすを見上げています。17時30分ごろ、2匹は続けて巣箱を出ました。

1月18日 2匹並んで



ムササビは丸くなって寝ていることが多いです。今日はめずらしく仰向けで寝ています。2匹でぴったりとくっついていると、あたたかいのでしょうか。

集う、憩う〈後編〉



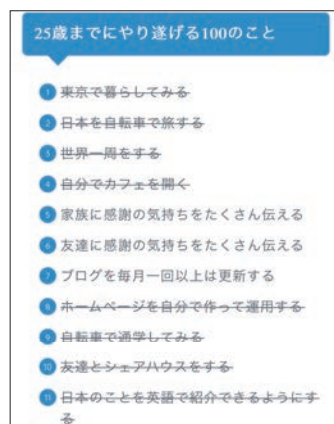
「Cafe & Dining tinymany」の店内にて。写真が苦手と言いながらも、やわらかい笑顔を向けてくださった（2024年2月17日）

前号で「Cafe&Dining tinymany」の魅力について触れた。カフェでは都留の自然を目や触覚で感じながらジビエなどの美味しい食事が味わえ、さまざまな人が集まる。そのカフェの代表をつとめる黒澤俊さん(30)は、失敗を恐れずに目標に向かう行動力と都留を大切に想う気持ちを持っていた。それらはいったいどうやって生まれたのだろう。ひきつづきお話をうかがってみる。

夢で終わらせない

黒澤さんは本学の卒業生だ。在学当時の生活についてうかがうと、記憶を辿るように遠くを見てから「ウィツシュリストをつくっていたな」とおっしゃった。ウィツシュリストとは、やりたいことをリストアップし、実行できたらマークをつけることで、できたこととできなかったことを可視化するものだろう。はじめに10個ほど立てていた目標は、大学3年生のときには100個を超えた。私も大学の講義でやりたいことをリストアップした経験がある。しかし15個しか浮かばなかったため、好奇心の違いをしみじみ感じた。やりたいことがたくさんあったんですね、やろうと「そうでもないよ」と黒澤さんは笑いながら首を横に振る。ひとつの目標を細分化して自分のやるべきことを明確にしたただけだという。とるべき行動が明らかになると、ばくぜんとした目標が達成しやすいものになる。これを黒澤さんは続けてきた。

夢に向かって進む黒澤さんの行動力は、つぎつぎと挑戦することが好きなところから発揮されるのだ。



20歳の黒澤さんがつくった「ウィツシュリスト」の抜粋

出会いを大切に

黒澤さんは大学生のとき、海外に行つてみたいと考えていたそう。足を踏み入れていない場所への憧れと、自由な時間があつたからだ。また、2年生の冬にゼミへ所属したことも、海外へ行きたい気持ちを後押しした。東南アジアを中心に研究を進めるゼミだが、黒澤さんは東南アジアに行つた経験がなかった。せっかく学ぶなら自分の五感を使って国を知りたいと考え、アルバイトで資金を集め、2年生の春休みにマレーシアへ飛び立った。旅行資金は日本円で4万円。予算にまったくゆとりのない旅行プランだ。旅行先でたくさんのお土産を買ってしまう私なら、2日足らずで予算を使い切ってしまうだろう。

マレーシアに着いた日の夜に宿泊先であるゲストハウスに行くと、屋上が開放されていた。せっかくなら行つてみようと思屋上にのぼると、欧米からの旅行者たちがたくさんいたそう。ほとんどが中高年だったため、当時20歳だった日本人の黒澤さんはとても目立った。そのうち声をかけられ、お互いの出身地や身のうえ話で盛りあがったという。その流れで、仲を深めた人から地元の人しか知らないような海岸に行つてみないかと提案された。翌日以降の予定を決めていなかった黒澤さんは、せっかく出会えた縁を大切にしようと思案にのつた。地元の人や他の旅行者と出会うなければ得られない特別な体験だ。時間的な余裕を持っていたからこそかもしれない。西洋や東洋の文化と人が混ざりあう東南アジア独特の世界に、心が惹きつけられたと黒澤さんはおっしゃった。

帰国後は身近なところにも多文化の共存が生まれる場所はないか探しはじめた。あるとき、立ち寄ったカフェで、老若男女がそれぞれ好きなことをして過ごしているすがたを見つけたという。黒澤さんが考える多文化の共存のイメージと、そのすがたがピッタリ重

なったため、カフェに興味をもち、カフェ文化の研究をはじめたそう。

第二の故郷

研究の第一歩として、世界中のカフェを見たいと思った黒澤さんは、3年生のうちに卒業に必要な単位の大半を取りきり、休学をして世界一周をはじめた。合計70か国をバックパックひとつで渡り歩いたそう。カフェの文化を研究するにはカフェで飲食する必要がある



ご縁で1か月ほど滞在させていただいたご家族との1枚。車の定員を超えても、車体にしがみついても移動することがしばしばあったそう（2016年12月、パキスタン 写真提供=黒澤さん）

あったため、どうしても食費がかかってしまふ。ならば他の費用をおさえようと、テントに寝泊まりしたり、なるべく徒歩で移動したりと、お金がかからないよう工夫をした。

旅をしているさなかに、黒澤さんは都留に帰りたいとしばしば思ったそう。どうしてですか、と私が尋ねると、「海外と比べて、都留の方が安心感があつたからかな」と黒澤さんは顔をほころばせておっしゃった。

黒澤さんは、都留で家庭教師のアルバイトをしていた。そこで勉強を教えている子のご家族と馬が合い、家族ぐるみの仲になるほど大切にされたそう。いっしょにご飯を食べ、旅行をするほど仲が良かったため、近所の人からは「○○さんちの長男」と勘違いされるほどであつた。楽しい時間を積み重ね、気兼ねないやりとりができるほど都留の人と仲を深めていた。それほど都留が居心地の良い場所だから、都留を大切に思う気持ちが育まれたのだろう。

旅から帰ってきたころには、黒澤さんは都留に多文化が共存する場所を作ろうと決めていた。都留がこれからも関わっていきたくたく強く思える場所だからだろう。

集う、憩う

夢を具体化してじつさいに行動することが、黒澤さんの目標達成の秘けつであった。そして新しいことに挑戦することが好きだったからこそ、行動し続けられたのだろう。

目標に向かって行動しているうちに、思いがけないたくさんの出会いがある。ひとつの出会いを受け止める余裕と大切にする気持ちが、新たな縁を結んでいた。それらが集まって黒澤さんのカフェはできている。

また、会話や体験を重ねることで自分を素直に表現できるようになってゆく。そうして心をゆるめる人が周りに増えていくのだろう。それらを繰り返すことで、どんな場所でも安心できる居場所が作れるようになるのだ。そうしてできた居場所が、挑戦を後押しする。挑戦を続ける黒澤さんには、安心できる居場所がたくさんある。

出会いという点が、やがて線となり、夢の実現へと形を結ぶ。いつか手にする夢のためにも、今の出会いを大切にして居場所を増やしていきたい。

高橋美唯（地域社会学科1年） 文・写真

都留の風景写真集

— 晩冬の候 —

2月5日に大雪が降り、都留は1日にして真っ白に染まってしまいました。見慣れている通学路も、雪が積もるといつもと違ったように感じられます。真っ白な世界で見つけた、冬ならではの風景を記録します。

北原日々希（地域社会学科1年）=文・写真



@本学グラウンド（2024年2月7日）



@本学1号館前（2024年2月5日）



@本学本部棟前 (2024年2月5日)



@都留市役所前 (2024年2月6日)

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 116 Mar.

発行人

北垣憲仁

統括編集者

西教生

編集長

原優希 (14-16,26-27)

渡邊結佳 (17-19,33)

編集

原口桜子 (1,20-23,24-25,37-39,52)

印南響 (28-29,44)

北原日々希 (30-32,48-49)

高橋美唯 (4-5,45-47)

谷上碧 (6-7,8-10,30-32,50)

根本菜桜 (2-3,34-36)

久永奈央 (41-43,51)

横山幸乃 (11-13,40)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 116号

発行日: 2024年3月19日

発行部数: 1000部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原3-8-1

都留文科大学地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail:

fieldnote.2020@gmail.com

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにあります。気軽にいらしてください。

編集後記

あのころの私

きいたところによると、小さいときの私はとことんマイペースだったそうです。生後1年と数か月でやっとつかまり立ちをはじめ、公園に行っても抱っこされたまま降りたがらなかったといます。母子手帳を見返すと、母はその時期の私を「なんでもゆっくり幸乃ちゃん」と書いていました。時間に追われる慌ただしい生活のなかでも、この言葉を思い出すと「自分のペースで過ごせばいいや」と安心することができます。(横山幸乃)

おかじまで買い物をしているとき、みたらし団子を見かけると幼いころの自分を思い出します。私は幼いころ、みたらし団子が大好きで、寝ても覚めてもみたらし団子を食べていました。しかし、中学生になってから、だんだんと執着が薄れ、高校生になったころにはほとんど食べなくなりました。「人生における定量を食べつくしてしまったのではないか」と考えています。いつかまた、みたらし団子に目覚めるときが来るかもしれません。(北原日々希)

くまのぬいぐるみとよく遊んでいました。といっても大人しい性格だったわけではなく、むしろ外遊びが好きな、活発な子だったそうです。1歳のころにジャングルジムの上まで一人で登って驚かれたことも。とにかく体を動かすことが大好きだった私は大きなけがも多く、両親には心配をかけました。今では落ち着きましたが、お出かけが好きなどころ、なんでもやってみたい好奇心旺盛なところは変わっていません。(谷上碧)

次回予告

花

2024年7月発行予定





フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？

私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。

発行日 2024年3月19日（年3回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大
地域交流研究センター フォーワード・ミュージアム部門『フォーワード・ノート』編集部